

よい語り わるい語り 19 会場でものを売る

作家が講演をすると、会場の後ろで本が売られることがある。

作家が自分で手配して送る場合もあれば

地元の書店が出張販売することもある。

ぼくも自分の本があるので、ものがたりライブが終わった後、販売やらサイン会をさせてもらうことも多い。

で、以前は「後ろでものを売らせてほしい」というと、たいてい会場側とひと悶着あった。

今でもたまにある。

一番多いのは図書館や公民館で「公共の場所ですから…」と断られることだった。学校に至っては「教育の場ですから聞くまでもないでしょ」という雰囲気だった。しかも、「公共の場ですから…」のあとのことばは濁されることが多い。あとは察しろということらしい。

一度、神奈川県のある市で相手の役所の人があまりに横柄に、さも当然でしょという顔でそうやってきたので、思い切って「なぜ、いけないのか教えていただけますか？」とていねいに聞きなおしたことがある。

すると相手は絶句し、説明できなかった。

役場の人間なのだから、たとえば「こういう条例がありまして」とか「営利目的のことはこまる。一部の人の金儲けに利用されては全体が不公平になる」とかなにか説明があるものと思っていたら、押し黙ってしまう。

「何か決まりがあるのですか？」と尋ねても答えられない。で、理由が言えないのに譲らない。

断る理由がないなら断らなくていいはずなのにそれでも自分で決められない。

失礼だが「決断していい状況なのに決断できない」というのは

「自分が責任取る」というスタイルで仕事をしてきていないことの証明だろう。

ともかく、話がスピーディーに進まなくて、こちらはこまる。

で、結局、売らせてくれない最大の理由は「前例がないから」ということだ。

でも、「前例がないから」という言い方では、よけい、ぼくはあとに引けなくなってしまう。

なぜなら、ぼくがここで引き下がると、ぼくのあとで講演に来た作家が「本を売らせてほしい」と申し出たときに、係の人が「前例がないのでお断りします。以前、杉山さんもお断りしました」といえることになる。つまり、ぼくが折れたことがまた前例になって、結果として会場側の主張を補強することになってしまうのだ。だから、後から来る人のためにもぼくはがんばらざるをえない。

その一方で「でも、〇〇図書館でも売らせていただきましたし、この頃はどこの図書館も公民館もオーケーになっていますよ」と明るく言うと、「あ、そうなんですか」とあっさり解禁になったこともある。つまり、たいていの会場は率先して反対する理由もなければ、むきになって賛成する理由もないらしい。突出してなにか変化するのをおそれているだけだ。

(で、ぼくの本を売ってもなんのクレームも起きたことはない。ずいぶん昔、なにかの宗教団体がセミナーであやしい壺を高額で売った事件があったがその辺の話がトラウマになっているのかもしれない)。以後はぼくの本を売ったことが今度は逆の前例となって、翌年、呼んでもらったときには当然のように販売コーナーをだせた。

その中間と言うのもある。つまり、図書館や公民館のスタッフはぼくの主張に賛同してくれているのだが、ほんとうに上司の許可がおりないのでだめというケース。

スタッフは板ばさみになっていて、さまざまな案をだしてくる。全部、実際に体験したことだ。

1、図書館の一般の利用者の目にはふれないように、ぼくがものがたりライブをした室内のみで売る。

これは参加者のみへのサービスに限定して名目も「資料販売」とする。

- 2、机は貸すけれど売るのはぼく一人で図書館側は見見ぬふりをする。
- 3、さらには図書館はまったく知らないという形で駐車場で売る。
- 4、駐車場もだめで、図書館の敷地の外に車をとめてその車の中で売る。

全部実際に体験した。

4のケースではぼくの講演会の最後に司会者が参加者に臨時の販売所を伝え、車を停めた路地までみんなで歩いてもらった。

ぼくも立ったまま、サインをした。

それでも販売できないより増しと言えるのかもしれないが、そこまでして図書館は一体なにからなにを守ろうとしているのかがまったくわからない。

確かに公共の場に毎日店をだしたら私物化になるかもしれないが、イベントに関連して終了後に30分くらい店開きして、サイン会をするだけだ。宗教も政治も無縁の話だ。

それで買ってもらった子どもは喜び、子どもが喜ぶのを見て親も喜び、売る側も収入になって喜び、みんながよかったねとなる。

その機会を奪ってどうするのだと思う。

それでなくとも、子どもたちの読書量や蔵書数は減っている。

これはさまざまなデータで出ている。

その理由はいろいろ考えられるが、

子どもの蔵書数が減ったのは親が子どもに本を買ってあげる習慣を忘れたからだ。お金を払うのは親なのだから、これはまちがいない。

親が子どもに本を買う習慣がなくなったから、親子連れで書店に行かなくなった。客が来ないから、書店は児童書を減らした。減らしたから、たまに町の書店に行っても児童書や絵本はほとんどなくなって買えなくなった。

それをくりかえしているうちに、親も子どもも本を読む楽しみを忘れた。だから図書館にも行かない。そういうことだと思う。

図書館は子どもと本を結ぶところだ。

児童書や絵本の販売は、まさにその機会そのものなのに、図書館がその機会を自ら捨ててどうする？

図書館で講演やものがたりライブを頼まれてステージに立つとその前に館長さんがあいさつしてくれることがある。そんな時よく「最近、子どもたちの読書離れが進んでいて頭が痛い」などと言う。

しかし、そういう一方で「図書館は本を売るところではありません」とすまして言えるのはやっぱりどうかしている。

「本気で心配してないでしょ？」と、言わざるをえない。

百歩譲れば、昔は親たちは町の本屋で子どもに本を買っていたから、それでよかったかもしれないが、潮流が変わったのだ。

図書館も変わっていかないと。

実際、図書館によっては司書さんが売り子に立って、ぼくの本を売って

くれるところもあるし、地元の書店を招いて図書館の一角で臨時販売コーナーを作ってくれるところもある。

ぼくは、販売オーケーなら車で自分の本を家から積んで行ったり、あらかじめ送らせてもらったりする。

ただし、図書館から「販売用の本は杉山さんが用意しますか？ それともこちらで地元の書店に出張を頼みますか？」と聞かれれば必ず書店を頼むようにしている。

餅は餅屋、本は書店が売って利益を得るものだ。

それに図書館と地元の図書館は絶対、共存共栄でなければいけない。

図書館と違って、書店は利益が上がらなければつぶれる。

そして地域の書店がつぶれそうなことに鈍感な図書館なんて役に立たない。

地域のことを考えていないとっていい。

地域のことを考えていると思うからこそ、たとえ利用者の少ない図書館でもつぶしてはいけないと応援するのだ。

「図書館が地元の書店の利益をはかる」というのはとてもすてきな発想だ。

買った方がいい本もあるし、借りた方がいい本もある。

ぼくたちの社会はその両方を使い分けられるようにできているし、

それをじょうずに使い分けるのが、じょうずに本とかかわるということだ。

本はなんでもかんでも借りればいいと思うのは下品だ。

とくに子どもにはなんべんでも読んで、寝る時枕元に置いておきたい本がある。

逆にすべての本を買っていたらお金が続かない。

一回読めば十分だという本もちろんある。

だから図書館と書店は使い分けるものだし、それができるようになっていくのも本と付き合い方のレベルアップと関係する。

もうひとつ、思い出したからついでに書くが、公共の場で

「本を売るのはいいけれど、売り上げの10パーセントをいただきます」と言うところがある。

これも地元の書店をつぶすお役所的発想だ。

書店は「それでは利益にならないから出店できません」となると思う。

その結果、いい本かも知れない本と出合う機会を失って

損をするのは利用者たちだ。

書店は別に押し売りをするのではなく、買いたいと思った人が買う機会を提供するだけだ。

本はほんとうに大勢の人の手をわずらわせて成り立っている。
だから 1000 円なら 1000 円の本を著者、画家から始まって
出版社に印刷所に製本所に流通に運送会社に倉庫会社にと
いろいろなところが何パーセントづつか取り、最後に
通常、書店が 20 パーセントを取る。

書店はその中から経営費をだし、従業員の給料をだし、
その上で純益が出るよう、やりくりをする。

当然、売れなければ苦しく、なにかをきりつめてやっていくしかない。

それなのに、自分たちが売り子に立ってくれるわけでもない

公民館がどうして 10 パーセントを取るのだろうか？

絵本で言えば、苦勞して時間をかけて描く画家でさえ

通常 5 パーセント程度なのに、

場所を貸すだけでそれより多い金額を

取れるとどうして思えるのか、ほんとにわかっていない。

会場で本を売る話についてはまだいろいろあるのだけれど、

あまり長くなるから、ひとまずこのへんで。

でも確実に図書館や小学校での本の販売はオーケーの方向に向かっている。

いいことだ。

実感としてそう思う。

都内のある小学校でものがたりライブをさせてもらったときの話だが、

終了後、PTA の役員が売り子に立ってくれて親相手に本の販売コーナーができた。

ぼくはその横でサイン会をしていた。

ぼくのサイン会は希望なら必ず「〇〇君へ」か「〇〇ちゃんへ」か子どもの名を入れる。

1 人の若いおかあさんが列に並んでサインをもらいに来た。

そうしたら、ぼくの横で見ていた女性の校長先生が涙をおさえている。

あとで「どうしたのですか？」と尋ねたら

「あのおかあさんが子どもに本を買ってあげるなんて…」と喜んでいたので。

なにかと問題が多い(たぶん虐待の疑い)親だが、まわりの親といっしょに

子どものためにサイン本を買うという、とても親っぽいことをした。

他の親が買うのを見てそんな気になったのかもしれないし、子どもに

ねだられたからかもしれないが、ともあれ、こういう機会を作った結果、

子どもにとって嬉しいことが起きたのだ。

そして子どもが喜ぶ顔を見るという、親にとってなにより嬉しいはずのことを

この親がしたということを経験した校長先生はとても喜んだのだ。